

## 平成27年度第2回史跡加曾利貝塚総括報告書編集部会 議事録

1 日 時 平成27年11月 4日（水） 午後3時00分～午後5時30分

2 場 所 千葉市埋蔵文化財調査センター 講堂

3 出席者 (委員)

泉委員、大貫委員、岡本委員、高橋委員（部会長）、藤尾委員  
(事務局)

飛田文化財課特別史跡推進担当課長、堀越加曾利貝塚博物館長、森本主査  
その他事務局職員  
(オブザーバー)

千葉県教育庁教育振興部文化財課 大内主任上席文化財主事

### 4 議 題

#### 報告

- (1) 特別史跡化に向けた取組みの進捗について
- (2) 再整理・総括報告書編集作業の進捗について

#### 発表

- (1) 東京湾東岸の貝塚の特質について
- (2) トレンチ出土土器の時期別分布状態から推測した南貝塚の貝層形成過程について

#### 議事

- (1) 事実記載分の記載・提示方法について
- (2) 総括部分の構成方針について

### 5 議事の概要

#### 報告

- (1) 特別史跡化に向けた取組みの進捗について  
資料1を用いて報告を行った後、質疑応答を行った。
- (2) 再整理・総括報告書編集作業の進捗について  
資料2を用いて報告を行った後、質疑応答を行った。

#### 発表

- (1) 東京湾東岸の貝塚の特質について  
資料3-1及び3-2を用いて説明を行った後、質疑応答を行った。
- (2) トレンチ出土土器の時期別分布状態から推測した南貝塚の貝層形成過程について  
資料4を用いて説明を行った後、質疑応答を行った。

#### 議事

- (1) 事実記載分の記載・提示方法について  
事務局説明の後、質疑応答を行った。事実記載部分は事務局案のとおり、作業を進め

ていくこととした。

## (2) 総括部分の構成方針について

事務局説明の後、質疑応答を行った。総括部分は報告書刊行の目的を明らかにして、未解明の部分も記載することとした。また、考古学史の中での加曽利貝塚の位置付けを整理し明確に記載するよう意見があった。

## 6 会議経過

### 開会

(飛田担当課長)

ただいまより、平成27年第2回史跡加曽利貝塚総括報告書編集部会を開催いたします。この部会は市の情報公開条例により公開となっております。議事録は事務局が作成し、部会長の承認により確定します。本日、佐藤副部会長、石川委員、設楽委員につきましてはご欠席との連絡を受けておりますが、半数以上の委員に出席いただいていることから、会議が成立していることをご報告申し上げます。また、オブザーバーとして千葉県教育庁文化財課の大内主任上席文化財主事に出席いただいております。

それではこれより議事に移らせていただきます。ここからは、高橋部会長に進行をお願いしたいと存じます。高橋部会長、よろしくお願いいたします。

### 報告(1) 特別史跡化に向けた取組みの進捗について

(高橋部会長)

それでは次第に沿って会議を進行してまいります。報告(1) 特別史跡化に向けた取組みの進捗について、事務局より報告をお願いします。

〔事務局説明：資料1を用い、進捗状況を報告。〕

(高橋部会長)

ただいまの事務局の報告を受けまして、ご質問等はございますか。

【意見は特になし】

### 報告(2) 再整理・総括報告書編集作業の進捗について

(高橋部会長)

続きまして、報告(2) 再整理・総括報告書編集作業の進捗について、事務局より報告をお願いします。

〔事務局説明：資料2を用い、作業の進捗状況を報告。〕

(高橋部会長)

ただいまの事務局の報告を受けまして、ご質問等はございますか。

【意見は特になし】

### 発表(1) 東京湾東岸の貝塚の特質について

(高橋部会長)

続いて、発表（1）東京湾東岸の貝塚の特質について、事務局より説明をお願いします。

〔事務局説明：資料3-1及び3-2を用いて、説明。〕

（高橋部会長）

ただいまの事務局の説明を受けまして、ご質問等がありますか。

（岡本委員）

現在の東京湾沿岸の貝塚の分析についてはよく分かりましたが、これをもとに総括報告書をどうしなきゃいけないかということはまた別の話だと思います。今の発表は個人的な解釈や研究的側面も入っていますよね。これを土台にして加曽利貝塚の分析をどうしていくのかをこの部会で議論しなければならないと思います。大型貝塚群の中で加曽利貝塚を焦点にあてて詰めていかないと。この資料がそのまま総括報告書の原稿になるわけではないですよ。

（事務局職員）

原稿になるわけではありません。この資料をたたき台として総括報告書の作成を進めていきたいと考えています。

（岡本委員）

解釈の問題まで踏み込んで資料を作成してあって、これはこれでいいと思いますが、いざ総括報告書を執筆するとなったとき、今回は個別の意見を聞きました、では委員として議論がしづらい部分があります。今回の発表は総括報告書のどの部分にあたるものになるのでしょうか。

（事務局職員）

委員の皆様から、今後、加曽利貝塚のこういったところを活かしていけばいいかご意見を伺うための前段階として、東京湾東岸の大型貝塚の概要等を説明させていただきました。

（岡本委員）

今回の説明を聞いている限りでは、いつまで経っても総括報告書はできない気がしてきました。ただ、総括報告書をどういった視点で検討していかななくてはいけないのかということにはわかりました。

（高橋部会長）

大型貝塚ということで加曽利貝塚だけではなく、他の貝塚の環境などにも目を向けてみようということですよ。また加曽利貝塚には縄文時代中期と後期の時期があるから、その時期別にも分けてと。ある程度、外堀を埋めていくような資料の感じがしましたが、岡本委員がおっしゃったように加曽利貝塚自体の情報はほとんどなかったですよ。今回はあくまでフレームワークでこれから核の部分を検討していくという理解でよろしいですか。

（事務局職員）

そのとおりです。

（大貫委員）

2点ほど確認してよろしいでしょうか。私は30年前に西広、祇園原貝塚に携わった経験しかなく、今回の発表を聞いてあの頃に比べたらすごく進歩して色々なことがわかっているなという印象があります。それでまず時期区分の問題ですが、加曽利EⅣ式と称名寺式で時期を分けることは一般的な話ですが、加曽利B1式と加曽利B2式・B3式の間で分けるというのは、集落や土器研究をしていた者からすると違和感があるかと。それと資料の第5図

で住居件数の説明がありました。これを見ると確かに堀之内1式で増加して、堀之内2式で減少し、加曽利B1式でまた増加しており、この後、加曽利B3式で減少しているように見えますが、次の曾谷式・安行1式をまとめてしまっているため、数値が増加していますが、曾谷式と安行1式を分離すると曾谷で減少するはず。そしてまた安行1式で増加するというようなグラフになり、その数字が住居件数からみた集落の全体の流れだと思います。それを踏まえて先ほどの話に戻ると、加曽利B1式と加曽利B2式のところで時期を分けるのはこれと連動しないと考えるとよいのでしょうか。

(事務局職員)

加曽利B1式と加曽利B2式で分けるという考えは、堀之内式から始まる集落が加曽利B1式までは継続するが、そこで途絶えてしまう集落が多くあるということがひとつ、加曽利B2式から始まる集落が多いということが挙げられます。そういった傾向を踏まえて表のような大別としました。

(大貫委員)

もう1点よろしいでしょうか。加曽利EⅠ式の地域の遺跡群として考えた場合に、先ほどの説明ではおゆみ野のほうで、このあたりは調査して分析されていますよね。そこでみると、加曽利EⅡ式の時期に突然小さな遺跡が出てきて、密度が高く集落が展開すると。ただこれは非常に特異な段階であって、普通は何箇所かの大きな集落とその周りに小さな集落ができる。周辺集落群も中間集落群もないことが普通の在り方で、加曽利EⅡ式の時期は非常に特殊な段階である、そういう理解でよろしいですか。そうすると、都川・村田川貝塚群の中で同じ括りになっている北側のほうにまさに加曽利貝塚があるわけですが、ここは『貝塚を伴う集落』がたくさんあるということで、有吉貝塚がある地域とはちょっと違うのかなと思います。有吉貝塚のほうには、『貝層なしもしくはごく小規模のおもな集落』が展開している。この『貝層なしもしくはごく小規模のおもな集落』が加曽利EⅡ式の時期に突然できた集落ということですかね。そうすると、それ以外の時期にはこの小さな集落はなく、『貝塚を伴う集落』が出来たとすると、かなり間が空いて密度は低くなりますよね。加曽利貝塚のほうは『貝塚を伴う集落』がたくさんありますので、これがもし常態であればかなり密度は高い。ですから、加曽利貝塚とおゆみ野のほうは、違う遺跡群なり集落群ではないのかなと。要するにおゆみ野はしっかり発掘して調査もされていますので分析することはいいと思うのですが、おゆみ野での分析結果を加曽利貝塚にも当てはめられるのか、その点はいかがでしょうか。

(事務局職員)

集落から出る遺構や遺物の内容は似ていると言えますが、集落の分布という点で見るとまだはっきりわかっていないということが実情です。ただ環状集落がひとつ、ふたつあってその周りを発掘すると小さな集落が出てくるところは変わらないことから、今のところはおゆみ野のような実例が加曽利貝塚を発掘すれば出てくると考えます。ただ今の時点でははっきりとわかっていることではありません。

(高橋部会長)

今回の事務局の発表は重要なトピックスを集めているので、細かく詰めていくと委員の皆さんからもたくさんの質問が出るかと思えます。このまま終わりということではなく、別途、

委員の皆さんの意見を集約していくようにしたいと思います。いかがでしょうか。今日は時間に限りもございますので。そう言うおきながら、私からも質問よろしいでしょうか。都川・村田川貝塚群と奥東京湾湾口部貝塚群の間に貝塚が無いエリアがありますよね。距離は10Km以上ありますか。先ほどの説明では具体的になぜ無いのかという説明はなかったと思うのですが、事務局の見解はありますか。

(事務局職員)

縄文時代中期にはそのエリアに河口干潟がなかったからだと考えます。そして中期の終わり頃になると、周辺の河口干潟がなくなってフラットな海が広がっていくと、その付近にオキアサリが大発生して、後期以降それらを利用したと今のところは考えています。

(高橋部会長)

それを証明できる根拠はありますか。

(事務局職員)

簡単な資料ですが、古海況の復元図というものがあります。

(高橋部会長)

要するに浜が無いことを証明できれば、なるほど浜が無くて貝が採れないからということに納得できるのですが。

(事務局職員)

浜が無いということは証明できないのですが、大きな河口がなかった、そこにある海老川などの川が大きな干潟を作らなかったということは言えると思います。

(高橋部会長)

生態学的な要因で理解できるということですか。

(事務局職員)

ある程度は理解できるものと考えます。

(高橋部会長)

この場所では貝に限らず、魚を採っていたという可能性はありませんか。

(事務局職員)

集落がないので、何とも言えないのが現状です。

(高橋部会長)

採れなかったということが物理的な原因ではっきりわかっている、集落がないのは当然ですね、ということなら理解できるのですが、集落がないので採っていないということではなかなか議論が成立しにくいのではと思います。例えば人文学的に考えると、湾口部の人たちと村田川・都川の人たちがそれぞれテリトリーを持っていて、互いにここを緩衝地帯、バッファゾーンとしていたので、ここには集落が存在しない。そういった可能性がないかということも検討の余地があるのではと考えます。例えばの話ですので参考までに。そういった意味でも今回の説明はいろいろなトピックスがありますので、いずれにしても各委員の皆さんから個別に意見を求めたほうがよろしいですよ。

(事務局職員)

はい。あくまでそのたたき台ということで今回資料を提示しました。

**発表（２）トレンチ出土土器の時期別分布状態から推測した南貝塚の貝層形成過程について**

（高橋部会長）

続いて、発表（２）南貝塚の貝層形成過程について、事務局より説明をお願いします。

〔事務局説明：資料４を用いて、説明。〕

（高橋部会長）

ただいまの事務局の説明を受けて、ご質問等がありますか。

（岡本委員）

今の説明と先ほどの説明をあわせ、こういった分析が進んでいるということはわかりましたが、これを踏まえて事務局としてどのようにまとめていくのか、それぞれの視点で分析していることをそのまま総括報告書に記載していくわけではないと思いますので、どのように編集していくのでしょうか。毎回、部会のたびに現在までの分析結果はこれですという報告だけでは前に進まないと思います。

（高橋部会長）

今の説明なども踏まえて、この後の議題（２）で構成の説明があるのですよね。

（事務局職員）

そのように考えております。

（岡本委員）

わかりました。ただ、今の説明を受けてそういった感想を受けました。

（高橋部会長）

では、議題（２）の時にご説明をお願いします。それと私から基本的な事実確認ですが、質問よろしいでしょうか。資料の「加曽利貝塚２次調査Ⅱトレンチ型式別分布状況」と記載のある表は、非常にわかりやすく、発掘グリッドが真ん中に行くにしたがって型式が新しくなるということですよ。実によく分かります。また62グリッド以降にも同じことが言えるということでもいいのですよね。そうすると、この表をみると、環状貝塚を真ん中で切ったら見事に対称になりますよね。

（事務局職員）

今回はⅡトレンチの状況を出しており、他のトレンチでも同様の表を作成してありますが、Ⅱトレンチはきれいに結果が出ております。

（高橋部会長）

この表をみるだけでは判断しにくい部分もありますが、ほぼ対称的に同じことが言えるということが重要であって、貝層の端から年代が新しくなるにつれて、より内側に形成されていくという理解でよろしいでしょうか。

（事務局職員）

部分的にみるとここは違うのではないかと思う箇所もありますが、全体の傾向としてはそういう理解でよろしいと考えます。

（高橋部会長）

わかりました。それと続けて事実確認なのですが、貝層が伴っていないかもしれないとありましたが、これは安行1式の段階でしょうか。

（事務局職員）

それについては、各遺物がどのように挙げられていたかを説明しなければならないのですが、各トレンチの中を2m四方のグリッドで区切って、そのグリッドの中で枝番をつけて遺物が挙がっています。その枝番はキサゴ層であるとか、褐色土層であるとか層についての注記があるものが多いのですが、そのラベル自体が遺物の水洗いまでの間に腐食して半分くらいになってしまったラベルが少なからずあります。なおかつ、ひとつのグリッドの中に例えば20番の枝番があるものがあります。3つか4つくらいならわかりやすいのですが、繰り返し同じ層のものや、そうと思える内容のメモがついているものもあるのですが、日によるので微妙に内容が違う。つまり20番の枝番がついているものと、2m四方の中の左から1番、2番、3番というような遺物のあげ方が想定されます。それが実際の各トレンチの土層断面図とどこまで対比できるのかというところにひとつ大きな問題があります。また、安行1式については、混貝土層と記載のあるラベルがつけてある遺物が少なからずあります。それから、加曽利貝塚博物館の元副館長である村田六郎太氏が『貝層の研究』という本の中で、混貝土層と混土貝層の記述は発掘している人にもよるが混乱している可能性が考えられると指摘しています。貝と関係している安行1式があることは間違いのないのですが、貝層が形成されている包含層なのか、貝層の形成が終わった後に貝が巻き込まれるような状態で出来上がってくる包含層の中の安行1式なのか、その見極めは現状残されているデータからではかなり難しいと考えます。また、貝に絡んでいるラベルの中から出たまとまった安行1式がどれだけあるか、まだ数えていないのですが、それが全体の安行1式の中で貝と絡んでいるものが大半だということまでいけば、貝層が形成されていた可能性は高いと考えられます。

(高橋部会長)

今の話からすると、失われたデータがかなりあると。50年も前の調査ですし、私もラベルが損傷しているということは経験がありますが、他の方法でリカバリーできないでしょうか。例えば断面図等から遺物の場所を割り出して、そこには貝があるという記載があるなどの確認はできないでしょうか。

(事務局職員)

加曽利貝塚2次調査の土層断面図の原図がまだ見つかっていません。報告書に掲載された墨入図とその墨入図の下図はあるのですが、個々の土層断面図は見つかっていません。その図があれば、改めて各グリッドのラベルの記載を確認し、枝番の順番をまとめる作業は可能かと思います。

(高橋部会長)

およそ何割くらいは整っているのですか。

(事務局職員)

正直なところ、どの程度の原図から土層断面図が出来上がっているかも検討がつかない状況です。

(岡本委員)

それは例えば探して出てくるようなものなのでしょうか。

(飛田担当課長)

すでに加曽利貝塚博物館にないことは確認しております。

(岡本委員)

整理作業を行っているときにどこかへ運んでいるのでしょうか。

(飛田担当課長)

当時、報告書を作成する段階で、調査する各大学へ運ばれたという可能性はあるかもしれませんが、そこから報告書に掲載するためのきれいな図面が戻ってきて、原図自体は戻ってきていないことは考えられるかもしれません。

(事務局職員)

もう1点報告なのですが、2次調査のトレンチが報告にあるようにきれいに十字に交差しているのではないだろうと考えています。「貝層の研究1」でどうもトレンチの設定が若干曲がっているということが再測量等によって見えてきています。全長170mのはずなのですが、交点と交点の間の距離が等間隔になっていないはずですが、IIトレンチの状況を見てもらうと、グリッドを示す数字に網がかかっている箇所は掘っていないはずのグリッドなのですが、そこから遺物が出ています。原因としては、グリッドを端から2mずつ測って距離があわなかったのだと思いますが、遺物はきっちり2mずつ区切ってあげてあることが考えられます。土層断面図とトレンチ内の遺構図は関連がないような図になっていますので、実際にはどこかで辻褄があわされていると考えることが妥当だと思います。平面的な分布と土層断面図でここまで貝層があるからということで、一致点がぴったり合うからこれでいい、ということはいえない状況です。ですので、ここはこれ以上詰められないという中で、総括報告書に反映していくことになると思います。また、再整理作業とは別の話ですが、将来の加曽利貝塚を整備する上では、かつての調査区を再発掘して検証することも必要であると考えます。

(高橋部会長)

いずれにしてもこのデータを基に分析して報告書に盛り込むことが最優先であると考えます。その間に発掘当時の資料が探して出てくるものなのか、その見極めも大事だと思います。今回の説明いただいた内容もこれまでの調査をしっかりと分析した結果ですので、これはこれで進めていくしかないですね。それと失ったデータはどの程度探しているのですか。

(飛田担当課長)

前々から探しており関係機関等には声をかけていますが、未だに見つかっていない。また世代が変わった中で各大学等へお問い合わせをしても見つけることは難しいと考えています。また大学も当時から建て替えなどで研究室も引っ越ししたりしていますので、余計に困難を極めると思います。失ったデータでどれほど影響があるかは、報告書の中にも記載して、報告書の信ぴょう性が疑われることが無いようにしたいとは考えています。

(高橋部会長)

すでに加曽利貝塚で出ている報告書がいくつかありますので、これに記載のあるデータなども使用してもらえればと考えます。他に質問等はございますか。

(泉委員)

先ほど説明いただいた資料ですが、下に貝層の範囲が示されていますが、それで見ると左と右では少し違いますよね。そうだとすると、ここで示された土器は貝層の年代なのか、貝層ではない年代なのか、その部分の区別についてはいかがでしょうか。

(事務局職員)



貝層の範囲を示した理由は、この分布を作成してその部分が指摘できないかと考え、資料に記載しました。この貝層の範囲自体が先ほど説明したように、グリッドがひとつふたつずれる可能性があります。ただ一方で出土状態が写真に載っているなどの理由で確実に貝層から出ている土器だとわかるものもあります。そういったものからその時期の貝層があることは間違いないと思われるところから詰めていく以外は、現在残っている資料からは限界があると考えます。

(泉委員)

わかりました。この資料の図だけ見ると、左側は加曽利Bの貝層である、右側は堀之内1式から安行までの貝層であると見えますよね。あまりにもきれいに結果が出ていたら、これこそまさにこの貝塚は環状であることの証拠と読み取れますが、貝塚によって貝層の形成の違いがあるという話になると、また別ということですよ。

(事務局職員)

Ⅱトレンチはきれいに結果が出ましたが、他のトレンチの結果を見ると、特定の時期がないわけではないですが、非常に薄くなる時期があります。例えばこのⅡトレンチであっても、右側であれば加曽利B 1式や加曽利B 3式が薄くなります。ただ全体を見れば左右対称で均一であるという見方もできますが、他のトレンチからみると均等に遺物が出てくるわけではなく、部分的にこの時期は少ないと言えるのが現状です。

(大貫委員)

貝層の年代を決めるのに土器型式を見ることと、もうひとつ、貝そのものをC 1 4で測る方法もあると思いますが、そのあたりのサンプルはあるのでしょうか。

(事務局職員)

サンプルはありますが、どの層から出土したのかということを図面で合わせるできない状況です。

(藤尾委員)

先ほどの説明の中で、5つのブロックがあってそれが繋がって馬蹄形に見えているという説明がありましたが、将来的にはその5つのブロックの形成の過程まで見えてきそうな状況でしょうか。

(事務局職員)

実際の調査を入れないと難しいと思います。現在あるデータでは、そういった可能性があることを指摘するまでが限界だと思います。

(藤尾委員)

可能性があるということは言えるのですか。

(事務局職員)

それは言及できると考えます。この時期が非常に少ないとか、ほとんどないという地点は、トレンチにかかっている貝層の部分で指摘することができますので、不均等に出来上がっていくということとは言えると考えます。その中で他と比べてある時期のものが極端に集中するポイントが存在することも明らかにできますので、全体が均等に出来上がっているものではないことははっきり言えると考えます。

(高橋部会長)

当時の測量は50cmコンターで行っていますよね。現在、貝塚の調査ではもっと細かくやっていますので、例えば10cmコンターで再度測量すればもっとはっきりわかると思います。また、先ほどの事務局説明の解釈に戻りますが、貝塚は3タイプがあり、加曽利貝塚の特に北貝塚はその中の斜面型でもなく、窪地型でもなく、マウンド型の貝塚でその一番古いものが加曽利貝塚から始まっていることが見えてきたということでしょうか。

(事務局職員)

それは北貝塚の類例をもっと集めないと言えません。現状ではいくつかある貝塚の中のひとつにしか過ぎません。

(高橋部会長)

年代でいうと、姥山貝塚が同時期くらいでしょうか。

(堀越館長)

そうですね。姥山貝塚はA地点の概報によると、住居跡の窪地にまず貝を捨てたことが広がっているという記載がありますので、おそらく中期の住居の窪地に対する貝の含有量は高くなっています。それに対して加曽利貝塚ではその数値はあまり高くない、姥山貝塚に比べると低い数値です。特に貝層断面をみると、窪地に貝を捨てていったというよりは、意識的に平坦地に貝を捨ててあり、加曽利貝塚の場合はそれが広がっていったと考えられます。2次調査では第1区・第2区の部分しか断面が調査されていませんので、何とも言えませんが、本来は山盛型の貝塚を形成していたものが平たく広がったと考えられ、その時期は加曽利EⅠ式が確実ですが、もう少し古い貝層があるかもしれません。いずれにしてもこの再整理作業でどのように時期決定するかが重要と考えます。

(高橋部会長)

斜面型、窪地型からスタートしていることが、この地域の古い姿を留めているのか、ということですね。いずれにしてもマウンド型というと、霞ヶ浦や利根川周辺にはありませんので、この地域独特の歩みだろうという気もします。例えばそれが市川の方面から埼玉あたりまで及んでいく、まさに東京湾の東側から埼玉まで、このマウンド型貝塚の形成が関係しているのだろうと推測しますが、いずれにしてもすぐに断定はせず、慎重に調査研究を進めてもらいたいと思います。

## 議題(1) 事実記載分の記載・掲載方法について

(高橋部会長)

続きまして、議題(1) 事実記載分の記載・掲載方法について、まず事務局より説明をお願いします。

〔事務局説明：資料5を用いて、説明。〕

(高橋部会長)

ただいまの事務局の説明について確認ですが、資料5に載っている事実記載の部分は、現状の項目を出してあり、これから拡充されていく理解でよろしいですか。

(事務局職員)

現状、議論が出来る範囲のものを今回は掲載しております。次回以降の部会で項目は増えてくるものと考えています。

(高橋部会長)

わかりました。資料5には挿図として住居跡の図が掲載されていますが、これも報告書でこういったテンプレートで掲載するという参考の資料ですよ。

(事務局職員)

はい。その通りです。

(高橋部会長)

他にご意見がないようでしたら、次の議題へ進みたいと思います。

## 議題(2) 総括部分の構成方針について

(高橋部会長)

続きまして、議題(2) 総括部分の構成方針について、事務局より説明をお願いします。

〔事務局説明：資料6を用いて、説明。〕

(高橋部会長)

ありがとうございました。ただいまの説明を聞いて、文化庁や千葉県ともよく協議して総括報告書を作成していかなくてはならないということがよくわかりました。普通の遺跡の報告書であれば、資料6の4～7は掲載しないですよ。オブザーバーの千葉県文化財課からは何かご意見ございますか。

(オブザーバー)

千葉県が求めているというわけではないですが、資料6の4及び5の部分は、加曽利貝塚が遺跡として考古学的にどのような意味を持っているか、その評価が記載される部分であり、6はその遺跡の評価とともに学史的にどう扱われてきたか、日本の考古学研究・貝塚研究でどのような位置付けであるかなどの学史的な価値もきちんと記載する必要があると考えます。大きく分けると考古学的な位置付けと、保護行政を含めた学史的な位置付けを意識しておくことが重要であると考えます。他の史跡と比べても学史的な価値は強調できる部分であると思います。

(高橋部会長)

会議の前半で話が及びましたが、本日の発表事項2点は資料6の項目でいうと、どのあたりに入ってくるのでしょうか。

(森本主査)

発表事項(2)の部分は、資料6の1～3の事実記載部分ごとのまとめに記載する予定です。先ほど説明しましたが、調査が不足している箇所については、課題として挙げていく必要があると考えています。

(岡本委員)

方針は理解しました。ただ、加曽利貝塚を強調するあまり、研究結果を断定的に記載してしまうのではなく、加曽利貝塚にはまだまだ分からないことがたくさんあってその後の調査も必要ということをしっかり記載してもらうことも重要と考えます。先ほどの2点の発表もここまでは現時点でわかったが、これ以上はデータが無いため分からないということで進めてはいかかかと思えます。もう一点ですが、前回の会議でも申し上げましたが報告書の編集体制を整える必要があると思います。確認ですが、この総括報告書は来年には刊行する予定

ですよね。

(森本主査)

来年度中には刊行する予定です。

(岡本委員)

今日の発表を聞いて、個別に研究が進んでいることは理解できましたが、それぞれの研究の成果をどのようにまとめていくか、具体的に掲載する挿絵とか写真をどうするかなど編集作業が常時行われているような状況を作らないと間に合わなくなってしまうのではと思います。その作業を進めていく中で出てきた問題をこの部会の議題として挙げてもらいたいと思います。事実記載の部分は、各委員の皆様を確認するとのことですが、お忙しい方ばかりなので、これも早めにやっていかないといけないと思います。

(高橋部会長)

基本的なことですが、総括報告書の分担はどのようになっているのでしょうか。

(森本主査)

資料2に記載しておりますが、事実記載の部分はそれぞれ分担を決めています。総括部分はまだ決定していませんが、堀越館長を中心にまとめていきたいと考えています。

(泉委員)

今回の再整理や総括報告書刊行の目的として、特別史跡を目指すという理解でありますが、あまりこれ以上は分からないという方向に持っていくことは得策ではないと考えます。特別史跡の指定はあくまで遺跡の評価をもって判断されるわけですので、出来るだけここまでわかったというまとめ方にしていくほうが良いと考えます。今後発掘して明らかにしたいということはわかりますが、特別史跡を目指すのであればその点で矛盾が生じないようにまとめていく必要があると考えます。もう一点、これは他の委員もおっしゃられていますが、加曽利貝塚が特別史跡になる最大のポイントは、日本の考古学史、縄文研究の中でどれだけこの遺跡が重要だったかという点ですので、この点をもう少し強調した項目が必要と考えます。

(岡本委員)

総括報告書の目的は刊行されたら終わりではなく、加曽利貝塚を活用していくことや、今後継続的に研究できる体制を作っていく方向で検討してもらいたいと思います。

(高橋部会長)

総括報告書では、事実記載の部分はきっちり記載することに加え、泉委員から意見があった加曽利貝塚でしか記載できない内容もしっかりと記載してもらいたいと思います。それと同時に未だ未解明の部分もどれだけ煮詰めて前進させたか、これが大事なところになりますので、きちんとまとめていくようお願いしたいと思います。

## その他

(高橋部会長)

以上で本日の議事はすべて終了となりますが、他にご意見等はございますか。

【意見は特になし】

## 閉会

(高橋部会長)

これを持ちまして本日の議事を終了します。それでは進行を事務局へお返しいたします。

(飛田担当課長)

委員の皆様、長時間、ご審議いただきありがとうございます。以上を持ちまして、平成27年度第2回史跡加曾利貝塚総括報告書編集部会を閉会いたします。

——了——